

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320049

研究課題名(和文) 随流寺院間に於ける経蔵形成とその位相に関する研究

研究課題名(英文) The research of classic books which has been left to scripture house of Zuishinin, Zentuuji and Anjuuin

研究代表者

中山 一磨 (NAKAYAMA, KAZUMARO)

大阪大学・文学研究科・招聘研究員

研究者番号：10420415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円、(間接経費) 3,780,000円

研究成果の概要(和文)：真言宗の一流派である随心院流(随流)に属する随心院・善通寺・安住院に於いて、古典籍の調査を行い、それぞれの経蔵の特徴などの解明に努めた。加えて他に10カ寺以上の寺院の経蔵を巡り、それぞれの必要に応じて蔵書の調査を行っている。

本研究では蔵書の全てを見通す悉皆調査の重要性を説き、一点一点の典籍の重要度に拘わらず典籍のデータ収集を行った。また、現地での活動に重点をおき、地域文化との接点を大切にすることで、古典籍保存の重要性を説いている。

研究成果の概要(英文)：This research is conducted a survey of classic books which has been left to scripture house of Zuishinin, Zentuuji and Anjuuin. In addition, we was tour of scripture house of 10 or more in the other temple.

And in this research, I preach the importance of the inventory survey targeting all of the collection. And It is regardless in the importance of the book one by one. I believe it will lead to the preservation of the classic book by placing the emphasis on activities in the field. Because it becomes the point of contact with the local culture.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：聖教調査 地域文化 善通寺 随心院 安住院 真言密教 神道 文献学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者中山はこれまでに数多くの寺院での文献調査を行ってきており、そこから得られる調査成果が、文学に限らず、日本文化全体に今後多大な資料提供源となる事を身を以て体感してきた。しかし一方で、既存の調査の有り方に違和感も禁じ得ず、また日々進化する IT 環境を如何にこの分野にも導入していくかといった課題も抱えていた。幸いにも、「安住院蔵書調査を基盤とする西国文化圏と伝播ルート解明に関する基礎的研究」(科学研究費補助金 若手研究(B) H.19 ~ 21 代表：中山一磨)が採択され、安住院において既存の方法に寄らない、独自の調査方針を模索する機会を得た。しかし、安住院は全くの未調査寺院でもあり、先ずは所蔵典籍の分量確認や、調査を可能とする保存状態の改善などが必要であり、上記科研の間には、比較的整理されていた貴重典籍の調査、及びその他の写本群の番号付加と書名認定を行う等々、基本環境の整備と一通り目を通すという作業に終始した。折しも、20年間継続されてきた国文学研究資料館による善通寺調査(国文学研究資料館文献資料調査 H.元 ~ 担当：落合博志)も規模が縮小される時期に差し迫っていた。更に、「小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開」(科学研究費補助金 基盤研究(B) H.17 ~ 19 代表：荒木浩)で一定の成果を得た随心院の調査も平成 19 年に科研が終了して以降、多くのやり残しを抱えたままであった。そこで、数年来これらの寺院調査に拘わってきた中山が代表となり、3 寺院での調査継続と関連寺院への調査拡大を目途とした科研を申請する事にした。

2. 研究の目的

随心院は真言小野流の一つである随流発祥寺院であり法流伝授の伝法本山である。一方、善通寺は元々は随心院門跡の支配下にあったが、現在は随心院を含む真言宗善通寺派の総本山となっている。また、安住院も現住生駒啄一師が随流阿闍梨であり、随流末寺となっている。即ち、3 寺院ともに現在は随流寺院となっているのであるが、その歴史は一樣では無い。そして、経蔵の成り立ちにもそのことは反映されていると考えられる。本科研では、複数寺院の経蔵を調査することで、経蔵というものの特徴や意義を捉え直すという事を一つの目的として設定した。

文学研究に寺院経蔵調査の成果が活用されて以来既に久しい。この間、各所から最古写本・散逸文献・新資料等の発見が相次ぎ、学会に衝撃を与えた事も少なくない。これは、既存の調査が歴史研究(古文書)中心であった為、未調査の聖教類の中に文学関係の研究フィールドが残されていたことに起因する。しかし、膨大な聖教調査での貴重書発見はその成果のほんの数パーセントに過ぎず、悉皆的調査で得られる成果は、文学・歴史・宗教・

地域文化等に大いに資する内容を含んでいる。にもかかわらず、調査後それらの文献を活用した研究活動は十分行われているとは言いがたい。このような現状がどうして起こっているのかという原因の解明と調査の在り方の再検討も大きな課題として取り組んだ。

経蔵とは抑も通常では人目に触れる物でも無く、それに関して考察しようとした場合、現前する問題として多くの経蔵を見なくては特殊と一般の区別も出来ないという問題に直面する。従って、上記 3 寺院に留まらず、可能な限りの多くの寺院を調査対象とし、各寺院での調査が有機的に結びつくような情報収集・発信の有り型を検討していく事が重要となってきた。これは研究期間中にも日進月歩で進化するデジタル技術・IT 環境をどう活用して進めて行くかということにも密接に関わる問題となった。結果的には本科研で最も労力を注いだ点でもある。

3. 研究の方法

寺院調査である故、基本的には対象寺院に赴き、そこで古典籍の書誌情報を収集し撮影を行うという事になる。次いで、それらを元に目録を作成し、重要な典籍の翻刻や解題・研究などを行うと言うのが通例であろう。しかしこの既存の調査形態の非効率性やその後の資料活用状況などの改善策の検討そのものが本科研の目標とするところでもある。従って、効率的な調査方法を構築する為に、調査の作成方法や撮影の仕方、及びそれらの公開の手段などの試行錯誤を繰り返した。具体的には後述の研究成果に記す。

なお、調査は既に軌道に乗っている善通寺などは日程調整をし、研究グループとして活動を行ったが、はじめて行く寺院等は中山が寺院との折衝、及び下調べを行った。寺院調査はお寺側の許可があつてはじめて行えるものであり、お寺との信頼関係構築は非常に重要である。特に地方寺院に於いては、何しに来たのか怪訝に思われる事も普通であり、また学術調査に非協力的な所も少なくない。幸いに調査許可を得ても、典籍そのものの管理状況が悪く、学術調査を行う以前の下作業が膨大になる事も珍しくない。従って、これらの作業はアルバイト補助員を使い、その後各専門に応じた研究者を招聘して行った。

4. 研究成果

随心院では当初、「小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開」(科学研究費補助金 基盤研究(B) H.17 ~ 19 代表：荒木浩)で行った識語集の続編を作成するための調査を行う予定であったが、寺院側の事情もあり一時調査を見合わせた。故に識語集成に関する調査は出来なかったが、一方で以前から公開を期していた『別尊雑記』59 巻と『伝授類聚鈔』25 巻の全巻を撮影し、PDF による電子書籍とし

て出版できる状態にまでした。これは単なる画像集ではなく、電子書籍ならではの機能として、目次と画像、及び大正新修大蔵經との対応ページや校異を埋め込んだ研究資料として作り込んだ。また、元画像は現状の市販デジカメ撮影としては最高レベルの画像で撮影しており、PDF 版電子書籍と共に随心院に寄贈した。これにより、貴重な原本を傷めること無くこれまで見るのがままならなかった典籍が見られる環境を整えた。随心院本『別尊雜記』は一部を除き鎌倉期の書写であり、また大正蔵底本の仁和寺本とは系統を異にしていると考えられる。仁和寺本は重要文化財でもあり原本閲覧は容易ではなく、随心院本と書写時期が近い旧宝菩提院本が各所に散逸してしまっている現在、随心院本は纏まった鎌倉期写本として見られる貴重な本である。カラーで見られる図像集として今後の研究に資する所は大きいと考える。一方、『伝受類聚抄』は高山寺の経弁が鎌倉期に勸修寺流の伝授資料を集成したもので、当時の勸修寺流の主な伝書の他、明恵以来の高山寺の伝書などを引いており、宗内の事相資料としてのみならず、歴史・文学・国語学等の文化資料としての価値も高い。高山寺には経弁自筆原本が残るが、高山寺本は 25 巻中 1 本欠けており、更に状態が良くないと聞く。随心院本は江戸期の書写ではあるが、非常に丁寧に書写された伝本で、状態も非常に良く全巻揃ってもある。現状では『伝受類聚抄』に関する写真も翻刻も公開されておらず、随心院本を公開する事の意味は少なくない。

以上 2 点は何れもそれなりに大部な聖教である。しかも何れも巻子の裏表に記事が載っており撮影はもちろん、PDF として作り込むのにも労力を要した。資料的価値も高く、出来れば直ぐに全面公開したいところではあるが、不正コピー等の問題もあり、現状では随心院以外には信頼の於ける範囲での限定配布に留めざるを得ない。

善通寺での調査は、『説話文学研究』第 44 号に「特集 善通寺の経典・聖教」として取り上げた典籍の撮影、及び『総本山善通寺聖教・典籍目録稿』（国文学研究資料館研究成果報告、平成 21 年度別冊）の補訂作業を継続して行う事を主として行った。同時にこれまで調査した典籍の中から主要なものを選び、撮影や詳細調書の作成等を行った。善通寺の聖教は国文学研究資料館がモノクロマイク撮影とそのネット上での公開を継続して行っているが、本科研では、より扱いやすく、精緻なデジタルカラー撮影を行い、研究資料としての共有を図った。当然ながら、善通寺当局にも保存用として画像を寄付し、研究資料としてのみならず様々な場面で活用出来るように取りはからった。これまでに善通寺聖教としてデジタル化したものは 571 書目 24158 ファイルに及んでいる。

なお、善通寺は近隣の寺院からの流入聖教で膨大な量の経蔵を形勢しており、他所との

関連聖教の宝庫でもある。調査にあたってはこの点に留意し行った。既に紹介した『真友抄』の書写者である妙智山正覚院の快澄に関する聖教は他にも確認できるが、実際塩飽本島にある正覚院を訪れると、快澄が当時の正覚院の中興であり多くの聖教を書写していた痕跡がうかがえる。また、安住院龍豊に関する典籍や、備前西大寺雲翁に関する典籍も確認でき、備前と讃岐の結びつきが非常に強かったことも資料的に確認できる。更に龍豊や雲翁の元を辿れば、それらの典籍は高野山成蓮院真源の伝書が中心となっていることも解ってくる。また一方で、浄厳や蓮體といった新安流に係る聖教も多数確認できる。蓮體自坊である地蔵寺（大阪）は「真言密教寺院の所蔵文献と近世前中期の説話文学に関する研究 地蔵寺を中心として」（基盤研究 (C)）代表研究者の山崎淳と共に調査しており、これらの聖教は聖教伝播を解明する上での貴重なデータとなり得る。更に随流聖教に関して触れておくと、随流の根本聖教と思われる典籍は随心院よりも善通寺に多く残っていると見える。しかし、抑も中世に遡るような固有聖教が無く、流入聖教で形成される善通寺経蔵に中世期書写の随流伝書があったとは考えがたく、恐らく元々は随心院にあったのでは無いかと考えられる。これは最後の随流大成者である旭雅が善通寺の出身であった事にも関係すると思われるが、複雑な両寺院の関係が経蔵内にも痕跡を残していると言える。

安住院調査は、完全に独自の調査として行い、様々な点で聖教調査の在り方を模索する場となった。先ず、書誌カードをそれまでの紙媒体から、PC での直接入力に変更した。これに伴い最終的にどの様なデータベースにするかという事まで考えた書誌項目の設定、及び入力規則の制定を行った。目指したのは将来的には、全ての寺院調査に対応可能な総合目録の作成である。例えば、既存の調査では調査者の裁量に任されている、伝持書名や聖教の法流種別などを新たな項目として加える等の項目追加等を行った。しかし、あらゆる写本に対応しようとして項目を細分化すると、結果的に該当記述無しの項目が増えすぎて、作業効率が落ちるなどしたため、纏められる項目は纏める等、試行錯誤を繰り返した。冊子本と卷子本では、書誌項目の入力順序が異なる為、入力タブを変える等の工夫も行った。更に、入力フォームのままでは閲覧に適さないので、閲覧ファームを別に作るなど、様々な問題の克服に努めた。

また、撮影に関してもそれまでの読めれば良いという撮影をやめ、保存画像として堪えうる画質を目指した。撮影台の自作や特注などもし、効率的に持ち運び出来て且つセッティングに極力時間を掛けない設備を構築するための試行錯誤を繰り返した。結果、現在では撮影業者に外注するのと遜色ない撮影が可能となっている。この事は研究効率の上

からも非常に重要で、即ち、聖教一つ一つをどのように撮影するかという事を一々業者と打ち合わせしなくて済み、且つ撮りたいときに必要な写真が撮れるのである。そして何よりもコスト面ではプロの業者に依頼する三分の一以下もかからない。これによって本科研では、寺院に複製保存用として恒久的に残せるデジタル画像を膨大に寄贈することが可能となった。しかしここまで撮影精度を上げる目的は、これまで研究者毎にフリーハンドで研究用に撮っていた画像では、個人の研究メモに過ぎず、物を何度も痛めては寺院にも後学の研究者にも何ら寄与しないとの反省の上にある。特に許可さえあればネット上での公開も可能となった昨今に於いては、それに備えた画像を用意するのは公的資金を使った研究ではもはや当然とせねばなるまい。

如上の試行錯誤を繰り返しつつ、安住院の調査は本科研で最も力点を置いて進めた。典籍総数は約 1300 書目、3300 点余りの調書を作成し、その 8 割程度の撮影を終えた。これを元に仮目録の作成も行ったが、校訂には至らず、識語の抜けも多い。また撮影も初期段階のものは画質が良く無く、部分撮影のものもあり、保存には適さないものを含んでいる。とは言え、現段階の成果を寺院に寄贈することで、今後の聖教管理と利用に大いに資する事は間違いあるまい。

また、安住院では平成 25 年度中世文学会秋季大会が岡山で開催されたのに合わせて、「瓶井山禅光寺安住院研究者限定特別展観」を行った。一日数時間限定で三日間のみの公開であり、学会会場からはバスかタクシーになるにも拘わらず、52 名（中世文学会会員 36・寺院関係者 4・地元教育庁関係者 2・地元博物館関係者 2・地元高校教諭 3・その他の研究者 5）もの専門家の来場があった。本展観で展示した典籍は 40 典籍余りであるが、安住院寺誌に拘わる資料、会陽（はだか祭り）に関する資料、密教関係古写本、中興増吽僧正に関する資料、古筆切れ、絵巻物、大名・公家に関する資料の 7 ブロックに分け、主な物には解説を附して展示を行った。当然ながら全て初公開で、大変多くの方々から素晴らしい展示であったとの賛辞を賜った。なお、この展示に関する図録的なものも作成しているが、紙面にする予算はなく、データ公開をするには画像流出の問題がある故、現状では寺院寄贈で留めるしかない。

さて、以上のような活動を行いながら、安住院経蔵の特徴を簡略に述べておくと、凡そ以下の 3 つに分類できる。

・貴所からの流入と思われる貴重書を含む寺院宝物類

・尊法・口傳・印信等からなる伝授資料群

・内外典を含む版本群

には鎌倉中期写『源氏物語』断簡や室町中期写『繪入り西行記』等をはじめとして注目

すべき典籍が含まれ、どうしてもそこに目を奪われる。しかし、本科研で最も力点を置いて取り組んだのは、の資料群である。数量的にもこれらが圧倒的に多く、しかも長年段ボールに雑然と詰め込んで放置されてきた為に痛みも酷く、湿気と虫に依る腐食を待つばかりのような状態であったが、これらの悉皆調査に取り組んできた。安住院聖教のほぼ九割は近世の写本になるが、稀に中世に遡れるものが出てくる。そしてその中には会陽（はだか祭り）に関する重要な資料や、増吽自筆資料などの重要典籍も含まれていた。これらは安住院の独自聖教であり、安住院や地域の文化資料としても貴重な発見と言える。

さて、これらは悉皆調査を行う事で、発見する事が出来たのであり、一点一点丹念に見ていく悉皆調査が今後の寺院調査で重要である事を改めて示したものである。とは言え、このような重要典籍は、これまで 3500 点あまりの調査を行ってきた中のほんの一部の典籍である。単純に計算して個別典籍として研究に値する典籍は 1% に遙かに及ばない。個人の研究対象に限ってしまえばその確率は更に低下する。つまり、時間・労力・財力に比して、悉皆調査の研究効率は極めて悪いと言わざるを得ない。即ち悉皆調査を行う事の重要性は認識出来ても、非常に無駄な作業が多いと言わざるを得ない。この点を解決しない限り寺院調査が”お宝探し”と揶揄される事に反論出来まい。ところが悉皆調査を行う事で自ずと見えてくることはその寺院の経蔵にある典籍の中に、ある時代・ある僧・ある種類に関連する典籍が集中して出てくるという事である。これは即ち、経蔵とは無秩序に体積した書庫ではなく、それぞれが何らかの書群に属し、それぞれ理由をもって集積している事に気づかされるのである。であるならば調査そのものも、この書群を把握し経蔵内の典籍を書群で捉えるという方向に目的意識を変える事で、悉皆調査ならではの新たな研究成果に繋がっていくと考えられる。この事は、偶然発見される一点の貴重聖教を求める研究から、一点一点の典籍の情報をデータ化し相対化する研究への移行を意味する。逆説的に言えば、そうすることによってより多くの貴重書の発見にも繋がると言えよう。

その他、本科研で典籍の残存確認や調査などを行った寺院は、松尾寺・覚城院（以上、香川）・佛教寺・備中国分寺・木山寺・無動院・常楽院・遍照院・（以上、岡山）・極楽寺（広島）・妙法寺（兵庫）・西福寺（京都）などが上げられる。この内、妙法寺では紺紙金泥一切経の調査・撮影を行い、国分寺では高松城水攻め等の資料にもなり得る『清水宗治記』の撮影を行うと共に聖教類の悉皆調査に取りかかっている。覚城院では聖教類保管状況の改善に取り組んでおり、その後の悉皆調査への環境整備を行っている。平成 27 年度に開山 1200 年を迎える木山寺では、その記

念事業として寺内での宝物展示を目指しており、その基礎となる学術調査の準備に入っている。西福寺では既に神道灌頂関連典籍の調査が終わりつつあり、平成 26 年 8 月には国文学研究資料館での展示、及び 12 月の佛教文學會では西福寺神道灌頂書に関するシンポジウムの開催が決定している。

本科研では、その地域の文化史と密接に絡んだ寺院調査を行うことによって、地元文化との結びつきが強くなり、地元の文化事業での講演依頼などもしばしば受ける事となった。無動院（岡山県玉野市）では鉄眼版一切経の虫干し作業を主導し、後にその時注目された増伴僧正石棺に関する取材記事が山陽新聞（2014.1.19 朝刊）に掲載されるに至ったのもそういった活動の一例である。

年間平均 60 日以上を現地での調査に費やし、撮影と書誌データ収集を重点的に行った 4 年間であった。それらを元にした論考は各研究者の関心に従って様々な媒体を介して公表してきた（後掲）。一方で画像などの公開には現状では様々な問題が絡んで、基本的には多くのものを寺院内公開に留めざるを得ない。

しかし所謂目に見える研究成果以上に、学術調査とは全く無縁であったお寺や地域に、「聖教」という言葉の説明からその意義を説いて歩いた事は、日々失われていく古典籍の保存に聊かなりとも貢献できたのではなからうかと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 17 件)

伊藤聡、カミ信仰から「神道」へ、創、47、54-82、2014、査読無し

伊藤聡、幻視される始原 - 中世神道書における天地創成説、古代文学、53、19-28、2014、査読無し

落合博志、仏書から見る日本の古典籍、調査研究報告、34、1-11、2014、査読無し

中山一麿、地域資料の調査・活用という観点からみた説話研究、説話文学研究、48 巻、57-65、2013、査読有り

伊藤聡、中世神道・神祇信仰の観点からみた説話研究、説話文学研究、48 巻、46 - 57、2013、査読有り

伊藤聡、「神道」研究管見、日本思想史学、45、2013、51-63、査読無し

落合博志、『申楽談儀』用語考二題 「うるわしき為手」「前後し前後し書く」、能と狂言、10、106-112、査読無し

伊藤聡、勸修寺蔵『大日如来金口所説一行法身即身成仏経』 翻刻と解題、勸修寺論叢、8 巻、37-48、2012、査読無し

伊藤聡、天文年間における吉田兼俱の山口下向をめぐる、文学、13-5、104-120、2012、査読無し

伊藤聡、「若梵若聖偈」の形成と享受、アジア遊学、161、163-175、2012、査読無し

伊藤聡、善通寺聖教のなかの大須観音真福寺関係資料について 特に良勢・信慶をめぐる、善通寺教学振興会紀要、17、61-78、2012、無し

中山一麿、経蔵調査研究の問題点と展望、仏教文学、36.37、-、2012、査読有り

落合博志、『檜垣』の構想 つるべと輪廻の喩について、能と狂言、9、134-136、2011、査読無し

落合博志、世阿弥筆能本『松浦之能』筆跡小考 袖に涙のさわぐかな、観世、平成 23 年 12 月号、35-41、2011、査読無し

伊藤聡、中世神道の形成と無住、無住 研究と資料(あるむ)、創刊、68-108、2011、査読無し

中山一麿、善通寺蔵『真友抄』の翻刻(後編)、善通寺教学振興会紀要、16、29-94、2011、査読無し

中山一麿、忠阿上人の生涯、詞林、47、37-49、2010、査読無し

〔学会発表〕(計 9 (確定予定 2) 件)

中山一麿、西福寺神道灌頂の系譜(仮)、佛教文學會、2014 年 12 月 14 日、奈良女子大学

伊藤聡、神道灌頂と西福寺資料群(仮)、佛教文學會、2014 年 12 月 14 日、奈良女子大学

落合博志、和歌・連歌・平家と能および早歌 諸ジャンルの交渉、中世文学会、2014 年 5 月 24 日、早稲田大学

中山一麿、地域文化の再発見 寺院所蔵文献が語る世界、京都府綴喜郡井手町文化協会、2013 年 02 月 15 日、井手町山吹ふれあいセンター

中山一麿、地域資料の調査・活用という観点からみた説話研究、説話文学会、2012 年 04 月 21 日、駒沢大学 駒沢キャンパス

伊藤聡、中世神道・神祇信仰の観点からみた説話研究、説話文学会、2012 年 04 月 21 日、駒沢大学 駒沢キャンパス

伊藤聡、神道灌頂の形成、立教大学日本学研究所主催国際シンポジウム「日本学の現在と

未来」、2012 年 12 月 04 日、立教大学

中山一麿、笠置寺の変遷と縁起類の諸相、シンポジウム「木津川ものがたり～縁起絵巻の世界～」、2011 年 11 月 26 日、木津川市加茂文化センター

伊藤聡、日本中世における胎内五位説の受容と展開、E A J S (ヨーロッパ日本協会) 総会、2011 年 8 月 25 日、タリン大学(エストニア)

〔図書〕(計 8 件)

末木文美士・小峯和明・兵藤裕己・富島義幸・伊藤聡・他 7 名、岩波書店、岩波講座 日本の思想 第七巻 儀礼と創造、2013、332 (伊藤 143 - 177)

落合博志、笠間書院、『古典籍研究ガイド

ンス 王朝文学をよむために』所収「古典籍の原本を見る」、2012、461 (418-428)

伊藤聡、中央公論新社、神道とは何か 神と仏の日本史、2012、306

伊藤聡、勉誠出版、『東アジアの今昔物語集 翻訳・変成・予言』所収「臨終と魔」、2012、736 (242 - 260)

伊藤聡、ペリかん社、『日本思想史講座 2 中世』所収「神道の形成と中世神話」、2012、408 (299-332)

落合博志、竹林舎、『中世神話と神祇・神道世界』(共著、うち「『神道雑々集』の基礎的問題」を執筆)、2011、589 - 608

伊藤聡(編著者)、竹林舎、『中世神話と神祇・神道世界』、2011、638

岡雅彦・落合博志ほか、勉誠出版、江戸時代初期出版年表、2010、706

〔その他〕

PDF 版随心院蔵 『別尊雜記』 私家版

PDF 版随心院蔵 『伝受類聚鈔』 私家版

瓶井山禅光寺安住院蔵書目録 寺内閲覧版

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 一磨 (NAKAYAMA KAZUMARO)

大阪大学・大学院文学研究科・招聘研究員
研究者番号：10420415

(2) 研究分担者

落合 博志 (OCHIAI HIROSHI)

国文学研究資料館・研究部・教授

研究者番号：50224259

伊藤 聡 (ITOU SATOSHI)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：90344829

(3) 連携研究者

荒木 浩 (ARAKI HIROSHI)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：60193075

渡辺 匡一 (WATANABE KYOICHI)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：40306098

山崎 淳 (YAMAZAKI JUN)

日本大学・生物資源科学部・准教授

研究者番号：20467517

海野 圭介 (UNNO KEISUKE)

国文学研究資料館・研究部・准教授

研究者番号：80346155